ゆっくり子育て Q&A ⑤

児童期へ

Q 小学校で子供はどう成長、変化しますか。

A 人格の土台をつくる時期で、心身や知的能力、社会性が目覚ましく発達します。

小学校の児童を見ると、1年生と6年生ではこうも違うのかと驚くことがあります。たとえば運動会の紅白リレーで、6年生の体格の良さと迫力ある走りに圧倒されたことがありました。

5、6歳頃から性的な成熟が始まる11、12歳頃までは、小学校の時期と重なるので学童期と呼ばれ、感性が豊かになり、身体や社会性が目覚ましく発達します。卒業する頃には、大人と同じような論理的な思考もできるようになります。

●自律を身につける

学童期は教育の黄金期で、人格の土台をつくる大切な時期です。しても良いことと悪いことの区別や、自律を身につけて生活リズムをつくります。自律とは他律の反対で、自分で自分をコントロールし、自分の意思で行動できるようになることです。

学校では始業のベルに合わせて席に戻るなど、規則や習慣に従うことが求められます。また友達をつくって円滑な学校生活を送り、学習課題に取り組んで興味や関心を広げ、先生との関係を通して自分を見直したりすることが課題になります。

近年、先生のお話が聞けなかったり、授業中に勝手に歩き回ったりするなどの「小1プロブレム」が問題になっています。絵本を読んでもらった子供は、お話をきく姿勢ができているのが先生にも分かるそうです。

初めは環境の変化に慣れるのに精一杯なので、多少不安定になっても必要以上の心配はいりません。学童期は、①しっかり食べて②よく寝て③外で群れて遊ぶこと。家庭では子供の話をよく聞いてあげ、安心できる大人との関係があれば大丈夫です。

Q 褒めて育てることが大切といいますが、何を褒めていいか分かりません。

A 子供のいいところを5つ、見つけてみたらどうでしょう。

ある小学校の先生が子供たちに「親によく褒められていると思うか」と聞くと、「はい」と答えた子供が3割くらい。次に懇談会で親たちに「子供さんをよく褒めていますか」と聞いたところ、「はい」と答えた親が7割くらいで、種明かしをすると大笑いになったそうです。

親は子供を褒めているつもりでも、子供たちはあまり褒められたと思っていないのですね。二宮尊徳の言葉に「可愛くば5つ教えて3つ褒め、2つ叱ってよき人となせ」とあります。叱るより大目に褒めるくらいが、ちょうどいいのです。

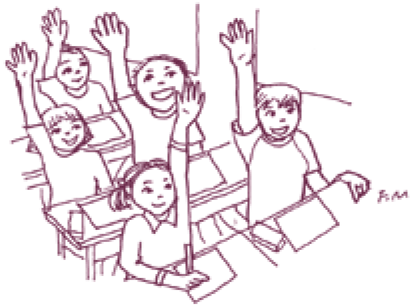
もっとも、見え透いたお世辞は見破られますし、心にもないことを言う必要はありません。勉強や習い事で「がんばっているね」とプロセスを褒めるのは、努力を認めることになります。結果が出なくても、また努力すれば達成できると思うでしょう。

子供に関心を持つことで、ツボを得た励ましや褒め言葉が出てきます。子供は健気なくらい、親のことを思っています。だから親がいつも自分のことに関心を持って見てくれていたら、親の愛情を感じるのです。

●親も自分を褒めよう

「小言のほうが多くなります」というお母さんは、夫婦で役割を振り返るといいかもしれません。お父さんが父親の役割をサボっていると、お母さんがその分までがんばることがあります。

親御さん自身も、自分のいいところを5つ挙げてみてはどうでしょう。「自己肯定感が大事」と頭で分かっていても、自分の悪いところばかり気にしていませんか。自分のことが好きになれば、子供のいいところも自然に見えてきますよ。



Q 小学生になっても、お気に入りのバスタオルを離しません。

A お気に入りでストレスを緩和しているので大目に見てあげて。

小学生になってもぬいぐるみやバスタオルを肌身離さず持ち歩いたり、チック症状が出たりするのは、環境の変化に対応しようと、子供なりにストレスを緩和しているからです。指吸いを続けると歯の形が変形するので、穏やかに話すか、いっそ思い切り一緒に遊んでみましょう。

子供の行動の背景には気持ちがありますから「あなたのことを見ているよ」という親の関心を伝え、いつもより大目に見ていれば、そのうちよくなります。

子供の成長は直線的な右肩上がりではなく、行ったり来たりしながら成長するものです。中学生でも赤ちゃん返りをして、親と寝たがったりしながら、親から離れていくのですから、大らかに見守ってあげてください。

●ワンポイント・アドバイス

表情と身ぶり手ぶりで大げさなくらい、褒めてみましょう。小さな子供には、そのくらいして気持ちが伝わるものです。